

令和 2 年 5 月 13 日現在

機関番号：24506

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13073

研究課題名(和文) 児童養護施設における学生ボランティア活動の実態把握と質的向上をめざした臨床研究

研究課題名(英文) A Clinical Study for Understanding the Actual Situation and Qualitative Improvement for Student Volunteer Activities in Orphanages

研究代表者

井上 靖子 (Inoue, Yasuko)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：00331679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として、第1に全国の児童養護施設を対象として調査し、学生ボランティア活動の割合、活動内容、リーフレット作成、担当職員の配置、職員との対話の体制、行政や大学に求めること、施設が抱く肯定面や否定面を把握した点である。第2に、ボランティア活動場面を事例として取り上げ、臨床心理学的観点から分析を行った点である。施設はボランティアをする上で、学生の人間的資質を最も重視している。また、学生が事前に必要な知識や技能は、1、子どもの発達的特徴、2、施設での暮らしに伴う子どもの心理や虐待の影響、3、発達障害の心理についての理解、4、傾聴や共感の姿勢、5、声かけや関わり方の工夫であることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義として、児童養護施設における学生ボランティア活動の活動実態を把握できたことであり、子どもや施設に与える肯定面や否定面の影響を分析したうえで、活用促進のために求められる施設側の体制、行政的対応や学生に必要な資質を明らかにした点である。また学術的意義としての新しい取り組みは、ボランティア活動の対話場面を取りあげ、臨床実践学的観点から事例分析を行い、質的向上を目指すために学生に必要な専門知識や姿勢を明示した点である。学生と施設の各立場に立脚した課題を精査することで、子どもの養育環境を具体的に改善していく取り組みとして学生ボランティア活動を位置づけ、その意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Our achievements in this research project can be summarized as follows.

Firstly, we surveyed orphanages across the country and discovered the percentage of student volunteer activities, type of activities, creation of leaflets, assignment of staff in charge, system for dialogue with staff, requirements of government and universities, and positive and negative aspects of the volunteer activities felt by the facility. Secondly, students' volunteer activities were taken as case studies and analyzed from a clinical psychological perspective. Institutions place the highest priority on the student's human qualities when volunteering. The knowledge and skills that students require beforehand include: 1) The developmental characteristics of children; 2) The mental state of children due to living in a facility and the effects of abuse; 3) The psychology of developmental disorders; 4) How to listen closely and sympathize; 5) How to talk to and relate with children.

研究分野：臨床心理学

キーワード：児童養護施設 子どもの養育環境の改善 学生ボランティア活動の実態把握 ボランティア活動の質的向上 ボランティア活動の事例分析 ボランティア活動における関係性 フィールド実践研究 心理社会的な地域支援

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

児童養護施設で暮らす子ども達にとって個別的な関心や配慮に行き届いた人との関わりは欠かせない(森田 2006,2013,内山 2013,田嶋 2009,西澤 2015)。しかし、施設職員の慢性の人手不足、多忙さによって、子どもに対する個別的な関わりが難しいため、学生によるボランティアを活用することも期待されている。伊藤・坂口(2003)は、学生ボランティアによるメンタリング活動に関心がある、あるいは取り入れたいと考える施設は全体の 93.41%に及び、期待は高いこと、学生が事前に備えてほしい資質として、定期性、継続性、意欲、専門性という 4 条件を挙げている。赤澤・桂田・谷向(2013)は、学生による学習支援に着目し、施設や NPO 法人の長を対象とした聴き取り調査を行い、学習支援の現状・成果・課題を明らかにし、学生が事前にある程度、専門的な視点で子どもをみる力をつけておく必要があると述べている。先行研究からも施設がボランティアを受け入れる場合、相性などのセッティングの労力が必要、トラブルが発生した場合への対応、学生の資質や能力に対する心配などがあり、ボランティアを受け入れることにも積極的になれない場合がある。一方、学生の側も、施設や被虐待児に対する否定的先入観、施設風土やルールに不慣れなための不安感、施設職員の多忙によるコミュニケーション不足、トラブルに対するスーパーヴィジョンがないなどで、継続が難しくなる場合もある。そこで、本研究は、**全国の児童養護施設の実態に基づいて、施設と学生のニーズを繋ぎ、質的向上をめざすには、双方にどのような改善点が望まれるのか、施設や行政にもとめられる体制や学生がボランティア活動を行なう場合に必要な専門性の具体的な内容、知識や技能の要点を明らかにしていくこととした。**

2. 研究の目的

本研究は全国の**児童養護施設における学生ボランティア活動の実態を把握し、その質を向上させるために施設に必要な体制や学生にもとめられる知識や技能の要点を明らかにすることを目的**としている。施設の実状に応じて子どもの養育に、学生のボランティア実践(遊び、学習支援、メンタルフレンド、プレイセラピー等)を有効活用することが望まれる。本研究では、個々の子どもや施設の在り方を尊重し、トラブルを防ぎ、関係形成のためにどのような体制が必要なのか、また、学生にはどのような知識や技能、活動指針が求められるのかを具体的に把握するという学術的意義がある。そして、学生が安心して活動に関与でき、施設も学生を活用しやすくなることによって、施設で暮らす子ども達の人間関係を豊かにし、養育環境を改善していくことに寄与していくという社会的意義がある。

3. 研究の方法

(1)本研究の目的遂行のために、3段階で実施した。第一に、全国の児童養護施設に質問調査用紙を郵送し、学生ボランティア活動の実態把握(施設の課題、ボランティア活動導入の有無、期待、活動内容、回数、人数や場面等、ボランティア担当職員の人数、パンフレットの作成の有無、職員と学生の連絡方法、ボランティア活動の意義、ボランティア活動のトラブル、これからの課題等)を行なった。このうち、学生ボランティア活動の意義や課題について自由記述されていた内容に対して KJ 法による質的検討を行った。

(2)第二に、学生と施設職員双方の立場からみえてくる学生ボランティア活動の意義と課題を検討することとした。まず、学生がボランティア活動を行うなかで、子どもとの関わりで何を問題としたのか、施設心理士に対してどのようなアドバイスを求めたのか、学生が作成した、ボランティア活動の実地経験における問題場面の逐語録を収集した。それらの問題場面に対して再度、臨床心理学的観点から事例分析を行った。さらに、施設が学生ボランティアに対して

何を求め、どのような期待をし、また課題を抱えているのかについて、ボランティア活動を取り入れている3施設（兵庫県、大阪府、愛知県）のボランティア担当職員に対して聴き取り調査を行なった。

(3)第三に、(1)で得られた調査結果のなかでも特に自由記述によって得られた内容の質的検討結果、(2)で得られた学生によるボランティア活動の実地経験に基づく問題場面に対する事例分析、3施設から得られたボランティア担当職員に対する聴き取り調査結果をふまえ、学生がボランティア活動をする場合に、どのような専門的な知識や技能が求められるのかについての分析や考察を行った。また、日本心理臨床学会において自主シンポジウム「臨床の知を生かしたボランティア活動 - 児童養護施設における取り組み - 」を企画し、学習支援ボランティア活動に取り組むNPO法人の代表やプレイセラピーのボランティア活動を行った臨床心理士らにもシンポジストとして登壇してもらい、ボランティア活動の意義や課題についての情報交換や討議を行った。さらに、弁護士、社会福祉士、家庭裁判所調査官等らによる講演会を実施し、社会的養護に関する知見の拡充を図った。最終的に、社会に発信していくため、ホームページを作成し、児童養護施設における学生ボランティア活動を紹介し、希望する場合は、本研究の研究成果報告書を配布できるようにした。継続的に児童養護施設における学生ボランティア活動について、今後も継続して、心理、福祉、教育、司法等の幅広い立場からの意見聴取や情報交換を行っていけるようにした。

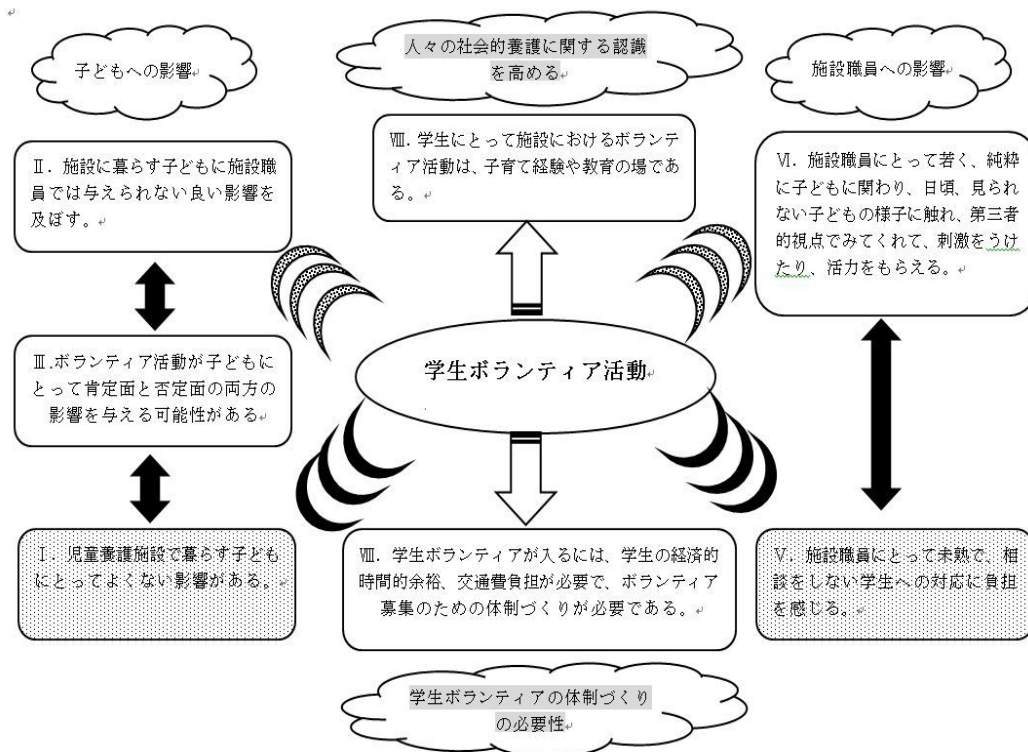
4. 研究成果

(1) 学生ボランティア活動への期待と課題

対象施設219施設のうち全体の67%は、現在の学生ボランティア活動について肯定感を抱いており、現状維持か積極的な導入を進めたいと考えている。「活動の体制ができれば」と乗り越えなければならない課題はあるものの、対象施設の96%は、学生ボランティアに対する期待を持っていた。また、ボランティア活動を取り入れるつもりはないとした4%の施設のうち、理由の記入を求めたところ、施設の近くに大学がないため、実績がない、施設で高校生も生活しているので、年齢の近い学生をボランティアとして受け入れると、高校生らの気持ちを刺激する、近くに大学がなく、公共交通機関がない、児童との不適切な関わり（性的逸脱）が発生したことがあるなどの意見を挙げていた。

また、学生ボランティア活動による肯定面、否定面の影響や課題について自由記述を求めた。その内容についてKJ法（川喜多，1986）で質的検討をしたところ、大きく4つのカテゴリーに統合された。具体的に、子どもへの肯定的影響として、子どもに1対1で関わってくれて、安心や安全感を提供してくれる、子どもにとって健康的な自立のための良いモデルとなってくれる、学生は、子どもらと年齢が近く、多様な考えを提供してくれる、子どもらが対人関係を高められる、子どもらの学習意欲を引き出し、学力が向上するなどの良い影響を与える意見の一方、子どもへの否定的影響として、子どもが落ち着きをなくす、学生との距離が近すぎて、友達感覚のため、不適切な関わりになることがある、学生は、トラブルが生じたときにも責任感や倫理観が乏しい、常識や礼儀やマナーのない、学生は自分の思い入れが強すぎる、また、逆に何のためにボランティアに来ているのかははっきりしない、無目的に活動している様子も散見され、子どもらに良くない影響を与えるとの意見もみられた。また、施設や施設職員への肯定的影響として、地域において、風通しのよい、開かれた施設にすることができる、学生は、若さがあり、純粹に子どもに関わってくれる、学生と子どもとのやり取りのなかで、日頃みることのない子どもの様子に触れることもできる、学生らが、子どもらの状態を第三者的視

点でみてくれる、学生に施設の仕事に関心をもってもらい、就職してもらえという意見や、施設職員が、学生らの活動を見聞することで、自らの仕事に対する動機づけを振り返り、初心に戻ることができ、刺激を受けて、仕事を続けていくための活力をもらえる、職員の負担を軽減し、マンパワーを補えるなどの意見がみられた。一方、施設や施設職員への否定的影響として、学生は、未熟で、困ったときも、施設職員に相談をしない、そのため、ボランティアをする学生の人数が多いと対応しきれず、職員の仕事の負担が増える、学生は、子どもに言われるままに行動をするので、適切な関わりのために、職員がフォローしなければならない、施設職員は、自らの仕事一杯で、助かるというより、これ以上、現在の生活が壊されたくないという意見が得られた。さらに、学生ボランティアの体制づくりとして、まず、施設や施設職員の希望として、ボランティア活動をしようとする学生に対して、人間的資質が最も求められている。さらに、施設で暮らす子どもの権利意識、倫理観に対する認識、ボランティアをするための事前指導を受けること、施設との間で守秘義務などの誓約を交わすことなどが必要である。したがって、事前に面談を受けてもらい、学生個人の人間的資質や基本的認識の理解の程度を確認し、これなら大丈夫だと判断された学生にボランティアをしてもらいたいという意見が得られた。また、学生がボランティアとして施設に関わるには、学生の経済的、時間的余裕が必要であるが、施設が街中から離れていることが多い。学生によるボランティア活動を活用していくために、施設は、行政機関に対して、ボランティア活動に必要な交通費や、ボランティア募集のための広報などを受け持ってもらいたいと望んでいる。施設が学生によるボランティア活動を継続しているのは、若い学生らに児童養護施設で暮らす子どもと接してもらうことによって、多様な育ちがあることを学び、将来の子育てにも生かしてもらう教育の場でもある。学生ボランティア活動は、一般の人々の社会的養護に対する認識を高める役割があるという意見が得られた。



(2) 学生ボランティア活動の実態

2017年では、対象219施設の64%と半分以上の施設で学生ボランティアを受け入れている。ボランティア活動の内容は、遊びや行事の支援、学習支援が中心であった。

また、学生ボランティアを導入している施設のうち89%は、ボランティア担当職員を配置しており、平均人数は、1.7人であった。つまり、1名か2名の職員がボランティア担当の役割を引き受けている。学生ボランティア活動を導入している施設のうち、49%が活動のためのパンフレットを準備していたが、半分弱なので十分に整えられているとはいえない。

さらに、学生ボランティアと施設職員のコミュニケーションに関して、30%がボランティア担当職員、42%が当日の施設職員とのやり取りで活動していた。このことから、単に担当職員を配置するだけでなく、施設に関わるすべての職員が学生ボランティアに対して理解があるか否かその認識の高さが、学生らが活動するうえでも重要であると推察される。

(3) 学生ボランティア活動を取り巻く状況

児童養護施設に対して、施設全体としての課題は何かを尋ねたところ、職員の職業能力の向上(13.4%)、2.職員数の確保(10.9%)、3.子どもへの学習支援・進路指導(10.9%)、子どもの心のケア(10.2%)、施設退所者へのアフターケア(6.8%)であった。このように、基本的には、施設は、職員の職業能力の向上や増員に関心が高い。その影響もあって、ボランティア活動が施設に就職してもらうためのインターンシップや職業訓練の目的を持って奨励されている場合も少なくない。また、施設の95%が実習生(保育系41%、福祉系37%、教育系18%、その他看護系、医学系、司法系2%)を受け入れている。これらの実習生のなかで有能な学生をボランティアとしてスカウトし、就職に結びつけたいと考える施設も散見された。

(4) ボランティア活動の事例分析とそこで得られた事前に必要な専門的な知識や技能の要点

学生が学習支援のボランティア活動を通して、子どもとの関わりで困った場面として、(1)子どもと学生に対する攻撃的言動への対応、(2)子ども同士で攻撃的な行動をとった場合への対応、(3)学生により親密な関わりを求める子どもへの対応、(4)子どもから家族のことを聞かされた場合への対応、(5)子どもから性に関わる事柄を伝えられた場合への対応、(6)学生ボランティアの声かけや励ましを素直に受けとめられない子どもへの対応、(7)学習場面などで、作業や注意集中ができない子どもへの対応など、7場面が挙げられた。各々事例分析をしたところ、(a) **子どもの発達段階に応じた心理的社会的な特徴の理解**、(b) 表面的行動や言葉の字義に捉われず、その言動の背後にある子どもの心を想像し、子どもの心に耳を傾け、子どもの心に寄り添っていくこと、つまり**傾聴と共感の基本的姿勢**、(c) **施設で暮らすことに伴う子どもの心理**、特に**虐待の影響や家族への特別な思いへの理解**をもつこと、(d) 注意集中ができない、外部からの情報をなかなか受け入れられない、想像して待つことが出来ないなどの**発達上の課題をもった子どもの心理を理解**すること、(e) 子どもに働きかけるには、子どもとの関係性を形成するなかで、時機を見計らい、その褒め方や言葉の内容が工夫できること、子どもの注意力、集中力、情報の受容力、理解力など**子どもの心の状態に応じた声かけや関わり方ができるための知識や技能が必要**であることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 井上靖子	4. 巻 第19号
2. 論文標題 児童養護施設における学生ボランティア活動の意義と課題 - 4年間の体験レポートの質的研究を通して -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 兵庫県立大学環境人間学部紀要	6. 最初と最後の頁 27 - 44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井上靖子	4. 巻 初刊
2. 論文標題 児童養護施設における学生ボランティア活動の実態把握と質的向上のための一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 2016年度～2019年度科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 井上靖子
2. 発表標題 児童養護施設における学生ボランティア活動の実態把握と質的向上のための一考察
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第24回学術集會おかやま大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 湯永隆, 辻育子, 黄龍杰, Cheon SeongMoon, 司会; 富永良喜, 指定討論; 森田喜治
2. 発表標題 大会企画シンポジウム 2 日常トラウマを抱える大人や子どもへの心のケアとカウンセリング
3. 学会等名 第十回アジア災害後心理援助国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森田喜治主催，新谷佳菜，峰松優丞，竹本真梨，鶴田弘子
2. 発表標題 大会企画シンポジウム4自然災害後の復興ボランティア活動と被災者のこころのケア
3. 学会等名 第十回アジア災害後心理援助国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上靖子 森田嘉治 辻育子 井上博晶 森山誉恵
2. 発表標題 臨床の知を生かしたボランティア活動ー児童養護施設での取り組みー
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36回大会自主シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森田嘉治
2. 発表標題 Role of psychotherapists in children's home
3. 学会等名 The 9th Asian Post-Disasters Mental Assistance 中国山東大会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井上靖子
2. 発表標題 The Great Mother Archetype and Psychotherapy.Through play therapy for an abused child.
3. 学会等名 The 2019 International Association for Jungian Studies Regional Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上靖子
2. 発表標題 児童養護施設経験者の心理と支えについての一考察 - 「語られない語り」への関わりの観点から -
3. 学会等名 日本質的心理学会第14回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>卒業論文 榎尾 和希(2016)「児童養護施設入所児童に関わる大学生に求められている役割 - 児童養護施設Aでの夜間アルバイトを通して - 」2016年2月, 卒業論文未公開 吉高 沙都里(2017)「児童養護施設退所者の心理的居場所についての一考察」2018年2月, 卒業論文未公開 山本 千智(2018)「児童養護施設における学生ボランティア活動の課題とその解決のための一考察 - 施設心理士との話し合いの場を設ける意義 - 」2019年2月, 卒業論文未公開 笠松 真衣(2019)「児童養護施設で暮らす子どもにとっての学生ボランティアの意義 - 関わりから生まれる子どもの発言や反応に着目して」2020年2月, 卒業論文未公開</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森田 喜治 (Morita Yoshiharu) (90351329)	龍谷大学・文学部・教授 (34316)	